

『花嫁修業は恋の予感』

著：神香うらら

ill：こうじま奈月

千磨の出身地は岡山県北部の栗ノ木村という山間の小さな集落だ。県庁所在地の岡山市までバスと列車を乗り継いで三時間以上かかるような僻地である。通っていた公立高校は共学だったが、あんなふうの内容口調ともに軽やかな物言いをする生徒はいなかった。

見た目も話し方もまるでテレビドラマに出てくる大学生のような彼女たちに、千磨は今更ながら自分がひどく場違いな場所に来てしまったことを痛感した。

慶明大学には地方からの入学者も大勢いるはずだが、校門へ向かう学生の群れを見渡すと、自分以外の皆がお洒落で都会的に見えてくる。

すれ違った男子学生にじろじろ見られ、思わず睨み返す。

(どーせ俺は野暮ったいよ！)

睨まれた男子学生は、千磨の迫力にぎょっとしたように目をそらした。

しかしその学生以外にもちらちらと千磨を振り返って見ている人がいることに、本人は気づいていない。

服装や髪型など些末なことに思えるほどに、千磨の容貌は人目を惹く。

磁器のように滑らかな白い肌、少し茶色がかったさらさらの髪。すっきり整った輪郭に大きな紅茶色の瞳が印象的で、ややぼってりとした唇が愛らしい。体つきは華奢だが決して弱々しくはなく、健康で少年らしい色香を漂わせている。

十八歳の男にしてはあどけなさを残した千磨は、栗ノ木村でも評判の美少年だった。(あれは人口わずか二千人、しかも高齢化の村だったからであって、東京では通用せん)

そもそも千磨は美少年と呼ばれることを嫌っていた。「女の子みたい」と言われることが多い自分の顔があまり好きではない。

千磨としては、顔も体ももっと男らしくなりたいのだが……。

———ちょうど視界の端に、大股で颯爽と校門をくぐって歩いてくる若い男が飛び込んできた。

(そう、例えばあんな感じの……)

自分がこうなりたい、という理想をそのまま描いたようなその男に、自然と目が吸い寄せられる。

遠目にも一際長身なのが見える。百九十センチ近いかもしれない。その上肩幅が広くて手脚が長く、均整の取れた体つきだ。

(うわー……なんかモデルみたいだな)

黒っぽいスーツを隙なく着こなした長身の男は、どう見ても学生ではなさそうだ。かといって若手の講師や准教授という感じでもない。

男はずんずんとこちらに向かってくる。近くで見ると、顔もやけに整っていた。やや浅黒い肌に濃い眉と切れ長の目が印象的で、男っぽい美形だ。

(さすが東京じゃ。こういう絵に描いたような美形が、現実におるんじやなー)

正面から歩いてくる男をちらちらと眺めながら、千磨は男とぶつからないようにそつと左に避けた。

「……っ！」

目の前を、黒っぽいスーツの上着と濃紺のワイシャツ、シルバーグレーのネクタイを身につけた広い胸が塞ぐ。

互いに相手を避けようとして、同じ方向に動いてしまったようだ。

「すみません」

小さく言って、右に避ける。

「!?」

男もまた、千磨の動きに合わせて千磨の正面を塞いだ。

もう一度気を取り直して左に避けようとする、いきなり両肩をがっちり掴まれた。

「なっ、なんな!？」

思わず方言がぼろっと飛び出す。

「萩原千磨だな」

フルネームで呼ばれ、千磨は顔を上げた。

男は千磨よりも頭ひとつ分背が高く、間近で見上げると仰け反りそうになる。

(なんで俺の名前……)

千磨はこの男を知らない。初めて会ったのに、どうして自分の名前を知っているのだろう。

男は片手で千磨の肩を掴んだまま、スーツの内ポケットから折り畳んだ紙を取り出した。ぱさつと振って広げ、その書類と千磨の顔を交互に見て頷く。

「間違いないな。では来てもらおう」

男に腕を掴まれて連行されそうになり、千磨は慌てて渾身の力で踏ん張った。

「ちよ、ちょっと待って！ あんた誰なん？ 誰かと間違えとるんじゃ……」

抗議する千磨を、長身の男がじろりと見下ろす。

男の鋭い目に、千磨はたじろいだ。整った容貌と相まってやけに迫力がある。

「間違っなどいない。お前は萩原千磨だろう」

「それはそうじゃけど……俺になんの用？」

「お前に、俺の婚約者になってもらう」

「……………」

あまりにも突飛なことを言われ、千磨は面食らってぽかんと口を開けた。

一見まともそうに見えるが、この男は少し頭がおかしいのだろうか。

「悪いが急いでいるんだ」

男は無言を言わせぬ口調で千磨の腕を引っ張った。ついでに千磨のトートバッグも奪い取るようにして持つ。

「ちよちよちよ、待った！ 婚約者あ!？」

このままではわけのわからないまま連れ去られそうで、千磨は奪われたトートバッグを奪い返そうと取っ手を掴んだ。

男も負けじとバッグを引っ張る。周辺にいた数人の学生たちがいったい何事かと振り向いて見ているが、関わり合いになりたくないらしく誰も千磨を助けようとはしてくれない。

「あんたが何言ってるのか全然わからん！」

「言葉どおりの意味だ。お前を俺の婚約者にすると言っているんだ」

「俺、男じゃけど」

まさか女と間違えられているのではないかと千磨は心配になってきた。

パーカーの胸は平らだし、自分のことも「俺」と言っているのだが、ついさっきも後ろ姿とはいえ女に間違われたばかりだ。声も中性的で喉仏も目立たないし名前も女っぽいので、もしかしたらこの男は勘違いしているのかもしれない。

「そんなことはわかってる」

男は面倒くさそうに言って、ガードの緩んだ千磨の手からトートバッグを奪い取った。

「……あっ、おい、返せ！」

千磨は男のスーツの上着の襟に掴みかかった。人違いにしても、男の態度は一方的すぎて腹立たしい。

男のほうも千磨のパーカーの襟首を掴み、ずるずると引きずっていく。

「うわあっ、離せよ！」

身長も体格も劣る千磨は圧倒的に不利だ。

男に無理やり引きずられるようにして校門を出ると、大きな黒い車が停めてあるのが目に飛び込んできた。

(ベベ、べんつ!?)

栗ノ木村にはベンツに乗っている者などいなかった。隣町には黒いベンツに乗っている人がいたが、ヤのつく職業だともっぱらの噂だったことを思い出す。

「うわっ、ちよつと！」

男に後部座席に乱暴に押し込まれる。まるで荷物のような扱いだ。

座席に沈み込んだ体を立て直して逃げようとしたが、男が乗り込んできて退路を断つ。

ならば車道側のドアを開けて逃げるしかない。

「うわあああっ！」

ドアを開けようとするといきなり男が覆い被さってきたので、千磨は悲鳴を上げた。

本文 p13～19 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>